



## 前提条件の多い「理論」

最近不幸なことが続くAさんは、占い師に占ってもらうことにした。すると、あまりに多くの指摘事項が当たっており非常に驚いた。例えば、こってりしたラーメンが好きなことや、医者に通っていること、サイフを落としたことなどだ。Aさんは、「この占い師には予知能力がある」「自分の思念は周りに伝わっているのかも」などと考えざるを得なかった。どのような仮定を入れれば、この現象をうまく説明できるだろうか。

科学実験を行うと、前提条件や実験自体に間違いがないにも関わらず、正しく突飛な現象・結果が得られることがある。例えば、科学史では有名な話であるが、19世紀の天文学者ルヴィエリは水星の軌道の計算がニュートンの法則と異なっていることを発見した。この観測結果は実験的にも正しいことは証明されてい

たが、ニュートンの法則と整合がとれないため、困った彼は「未知の惑星ヴァルカン」の存在を仮定した。「突拍子もない仮定」を置くことで、観測結果をニュートンの法則と整合させたのである。

科学において、どんな言明や観測結果も、体系のどこかを調整したり、大胆な仮定を設けることで、正しい結果にできてしまうことは本質的な問題とされる。もちろん、惑星ヴァルカンなるものは存在せず、水星の軌道は、後に相対性理論で説明がつけら

れたのだが。

以上のように、理論の反証結果が出た際に、体系を保ちながら少しの調整で手直しするか、体系全体を修正するか選択の必要がでてくる。科学理論は一つ一つの命題や実験結果が相互に絡み合い全体を形成しているので、反証されるべきは全体と考えるのが、哲学者クワインの主張である。

プロジェクトにおいて、失敗材料が見つかった時に、全体はそのままに部分修正ですます場合と、そ

もそも計画全体の変更を余儀なくされる場合がある。この差はどこからやってくるのか？ 科学的な感覚では、仮定の単純さが基準になると言える。すなわち、修正によって仮定が減少する場合は部分修正で済ませることができ、逆に無理な仮定が増える場合には全体を見直す必要がでてくるのである。

前提条件の多いプロジェクトは失敗しやすいことや、非現実的な仮定の多い経済・金融理論に美しさを感じないことにも一理あるのだ。

ちなみに、冒頭の話は、占い業界が個人情報を入力しネットワークでつながっていると、占い師がサイフを拾った当人だったなどが考えられるが、どれが“修正の少ない”美しい仮定であろうか？

(外園 康智)

